

認知傾向による消費者の類型化

技術の特徴

- ・人間の認知には個人差がある。
- ・その個人差からリスクなどの情報理解の傾向を類型化できる可能性を示した。
- ・消費者の新たな分類方法として活用できる可能性がある。

研究の内容

人間の認知には2つのシステムが併存。両者の使い方には個人差がある。

・システム1

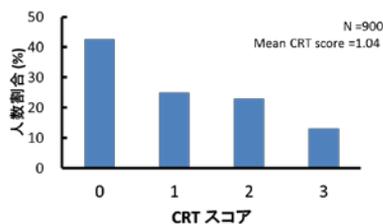
即断を必要とする場合や、膨大な数を迅速に処理するのに適しているが、エラーもある

・システム2

システム1の衝動的な反応を抑える“セルフコントロール”を担う。

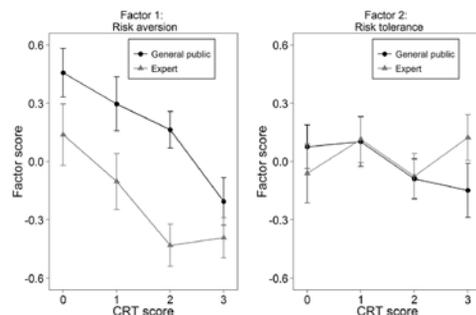
認知傾向検査 (CRT)

3問の設問からなる。得点は分析的思考の程度と関係すると考えられている。

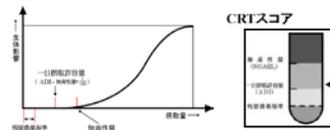
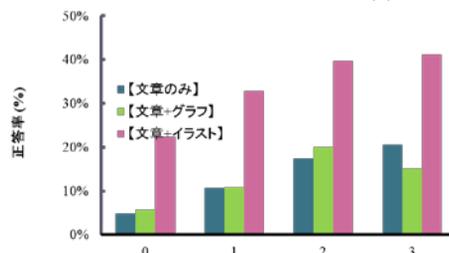


web調査によるCRT得点の分布 (30-40代女性)。

CRTスコアは説明表示に基づく農薬情報の理解や放射線汚染に対する認識をよく説明する。



基準値超えの放射性物質を含む水産物があがった地域の食品へ態度は2因子で説明され、職業やCRT得点によってリスク嫌悪の程度が変化する(1)。



架空の食品への残留農薬量とリスクの程度の認識の正答率とCRT得点の関係。グラフやイラストの並記やCRT得点で正答率が異なる(2)。

今後の展開

- ・認知傾向検査により食品の情報理解や印象の個人差がよく説明できる。
- ・web調査の結果、対象者の65%程度が分析的思考得点が1点未満である。
- ・消費者に対する情報開示は、このような認知傾向の分布を考慮して行う必要がある。

参 考

1. H Honda, M Ogawa, T Murakoshi, T Masuda, K Utsumi, D Nei, Y Wada (2015). *Food Quality and Preference*, **46**, 119-125.
2. H Honda, M Ogawa, T Murakoshi, T Masuda, K Utsumi, S Park, A Kimura, D Nei, Y Wada (2015). *Food Policy*, **55**, 33-40.
3. 松原・杉山・村越・増田・本田・和田 (2015). *映像情報メディア学会誌*. **69(9)**, J271-J277.